

は現在のところ精神症状の徴候はない。卵性診断は DNA マッピングにて行なった。

家系内に精神疾患の遺伝負因はない。父親は双子が高校2年の時に肺癌で死亡。母親は健康である。双子には兄がおり3人兄弟である。双子の出産は帝王切開で行なわれ、出生時ふたりとも仮死状態、体重はAが3100g、Bが1900gであった。

幼児期からふたりは、出生順位にしたがって、兄、弟として育てられた。Bのほうが体が弱かったため両親はAよりもBの養育に気を配った。Aは皆に迷惑をかけない模範的な子供で、目立たなく、非社交的であった。Bは少し落ち着きがなく、わがままではあるが、明るい子供で社交的であった。

Bよりも学業成績のまさっていたAは、高校卒業後、推薦で地元の大学に進学し、金融機関に就職した。一方Bは専門学校を中退して木工の組み立てや酒類運搬など肉体労働に従事している。

就職後Aは、職場で対人関係に悩み、強い自責感と自殺念慮が生じ、仕事に支障をきたすようになった。翌年の10月下旬「体の中に、沢山の人がいて話をしている、自分の名前を呼ぶ声がする」等の異常体験が始まり、「家ででの人格、会社での人格、病院での人格が分離している」とも訴えた。Aは11月に入院。Haloperidolを中心に処方し、症状は著明に改善した。翌年1月若干の残遺症状が認められるが通院可能な状態となり退院した。

検査所見では、脳波は、ふたりとも低振幅徐波が混入する異常を示し、頭部CTでは、Aに脳萎縮が認められたが、Bに特別の所見は認められなかった。ふたりのI.Q.はともに60(WAIS-R)である。Rorschach等の心理検査により、Aは自我機能の低下、精神内界の貧困化がうかがわれ、Bは細やかな情感が未発達で思考内容の幼さが目立っていた。

ふたりには、出生時の障害、出生体重、家庭内での位置付け、対人関係や社会適応、頭部CT所見、人格等に相違が認められる。今回われわれは、ふたりの生活史、病前性格、病歴、脳波、頭部CT、心理検査の結果を比較しながら、症例報告を行った。現在も治療を継続中であり、ふたりの不一致の要因については、資料がさらに集まった段階で、またあらためて分析する予定である。

7) 失踪と憑依をきたした1症例

矢走 誠 (柏崎厚生病院
精神科)
山田 治 (東大分院神経科)

症例Y. 17歳. 女性. 高校3年生. 成績は中位. 2人同胞の第2子で、父母、兄、祖父母、Yの6人家族。遺伝歴に特記すべきことはない。陽気で頭揚欲の強い性格であるが、目立つことは無く、やや不良がかった少数の友人がいた。

Yは、高校3年生になり「こっくりさん」をするようになった。夏休み中、同級生から「あなたのせいで、あなたの好きな人が退学した。」と言われ、塞ぎ込むようになった。登校日に「友達に会う。」と言って下校したきり、翌朝まで帰らなかった。帰宅時、失踪中の記憶は欠落していた。その後、再び塞ぎ込む毎日だったが、ある日、母に向い、常とは別の表情と声色で話し始め、数時間に亘り、「レイコ」、「タカシ」、「マサミ」と称する守護霊が交替で憑依し、Y本人を擁護し、母親を攻撃する内容の発言を続けた。

外来診察時、Yには守護霊達が憑依し、恰も、数人の人が会話しているようだった。

入院後、守護霊の「レイコ」は、Yの守護霊で何年も見守ってきたと女性的な声と柔らかな表情で語り、「タカシ」はYを気遣い扱いせず早く家に返すようにと男性の声音と恐れ表情で語り、「マサミ」は、幼稚な英語を繰り返していた。

Y自身は、母がYを家に縛り付けること(母に対する攻撃)、高校を卒業したら英語の専門学校へ行きたいこと(将来への希望)、好きな人にバレンタイン・デーにチョコレートをあげようとしたが断られ、夏の花火の日に町に行ったら彼と逢えるのではないかと考え何時間も町を彷徨ったが逢えなかったこと(失恋のエピソード)などを語った。

入院後加療により、守護霊の出現は徐々に減少し、約2週間で消失した。外出・外泊を経て、約7週間で退院となった。退院時も、失踪から入院までの間の記憶は不明瞭なままであった。

「こっくりさん」をしていたこと、Y自身が憑依している「守護霊」を認識していること、憑依しているものが動物ではなく「霊」であること、憑依がYの願望充足や葛藤解消の手段であることなど、日本の現代的な憑依の症例に合致していた。DSM-III-Rの「多重人格性障害」には合致したが、ICD-10の「トランスおよび憑依状態」や「多重人格障害」には合致しなかった。今後、

日本と欧米の視点の違いに注目し「憑依」の理解を深める必要があると考えられた。

8) 知覚潰乱発作にクロキサゾラムが有効であった1症例

鈴木 邦人 (新潟大学精神医学)
教室

山口・中井が、分裂病者における知覚の変容を中心とした種々の病理現象の発作的出現を「知覚潰乱発作」として報告して以来、同様の状態についていくつかの研究がなされている。今回、慢性分裂病患者で、知覚潰乱発作が cloxazolam の使用によって消失した後、haloperidol の増量によって再発した症例を経験したので報告する。

症例は29歳で発症した、現在46歳の男性の慢性分裂病患者である。1982年(35歳)より、H精神病院に通院し、種々の major 及び minor tranquilizer の投薬を継続して受けてきたが、不眠・嚙下困難を執拗に訴えたため、1992年7月27日に同病院に入院した。入院後の8月3日より、haloperidol を 4.5 mg から 20 mg へ増量されたが、その数日後より、時々「頭がボケーとする」と訴えるようになり、その2ヶ月後からはそれをほぼ連日訴えるようになった。この症状を抗精神病薬の副作用と考え、1993年6月25日に haloperidol を 20 mg から 10 mg に減量したが、この症状は改善しなかった。

そのため再度この症状について患者に詳しく尋ねると、「急に頭がフワーときて天と地がさかさまになったように見える」という知覚変容が主な体験で、不安を伴い、発作性に出現し、また自己治療努力をしている、という特徴が明らかになった。これらの特徴は、山口のまとめた知覚潰乱発作の特徴をほぼ満たしていた。知覚潰乱発作に minor tranquilizer が有効であるという山口・中井の報告を参考にして、1993年8月に cloxazolam 3 mg を処方したところ、その日のうちに「頭がボケーとする」という症状は消失し、以後11月中旬まで全く出現しなかった。その間、9月下旬からは体感幻覚に基づく嚙下困難の訴えが強くなってきたため、haloperidol を10月末までに 20 mg まで漸増したところ、11月中旬から再び「頭がボケーとする」という症状が出現した。このため、cloxazolam を 6 mg まで漸増したが、発作は消失しなかったため cloxazolam を中止し、diazepam に改薬し、それを 12 mg まで漸増したが発作は消失していない。

本症例で注目すべき点は、haloperidol の増量によって知覚潰乱発作が再発し、cloxazolam が奏功しなくなった点である。山口らは、ベンゾジアゼピン系の薬物を服用しているかぎり、発作の再発はないと報告している。また、佐藤、高木、渡辺は「抗精神病薬の増量や減量に一致して知覚潰乱発作が出現・消失した」ことから、本現象と抗精神病薬との関連を指摘している。本症例でも haloperidol の増量に伴って、知覚潰乱発作が出現・再発したことから、haloperidol は発作の出現に大きく関与していると考えられた。また、ベンゾジアゼピン系薬物が知覚潰乱発作を抑制できるかどうかは、その時点で使用している抗精神病薬の量との相対的な関係によって左右されるのではないかと考えられた。この点については、今後症例を重ねて更に検討を加えたい。

9) インターフェロン投与中に精神症状を呈したC型慢性肝炎の3症例

直井 孝二 (柏崎厚生病院)

【症例1】45歳男性、調理師。H5年2/1C型慢性活動性肝炎の診断にて内科入院、IFN α -2b 1,000万U \times 6回/週、2週間投与後退院し同量を3回/週で継続、2/22頃より不眠多弁傾向となり3/1職場で「神が乗り移った」と言って説教を始めた為当科初診。多弁、易刺激性、観念奔逸、「TVカメラが仕掛けられている、電波が心臓に入って痛い」といった幻覚妄想を認め同日入院。haloperidol の点滴から3日後には haloperidol, zotepine, lithium carbonate の経口とし zotepine を増量したが3/13より譫妄出現、levomepromazine と carbamazepine に変更し2日間で改善、その後爽快気分を残し4/7には精神症状は消失し5/20退院。入院時脳波は正常範囲、頭部CT上僅かに側頭葉の萎縮を認めた。

【症例2】47歳男性、ダンプ運転手。H5年6月にC型慢性活動性肝炎と診断され、6/28より IFN α -2b 1,000万U \times 6回/週、4週間投与。その後同量を3回/週で継続、8/24より微熱傾向、不眠出現、8/27より「近所の人がIFNを止めさせようと合図を送る、誰かが自分を見張っている」といった被害関係念慮が出現し、9/1当科入院。入院時、質問に対し応答が遅れたり聞き返す事があり、軽い意識障害の存在を伺わせた。levomepromazine, lormetazepan, estazolam にて4日後には精神症状は消失し9/27退院。頭部CTは正常範囲、入院時、退院前の脳波はいずれも8~9Hz slow α rhythmであった。